

癌守り

小松崎 和男 埼玉県所沢市 五十七歳

昨年肺に癌が見つかった。既に肝臓にも転移が見られ、生きる術を失った。しかし、退職願に「癌」と書いたつもりが「瘵」と書いてしまい「こんな不備があつては受け取れん。しばらくうちの畑作業を手伝え」と上司に言われてしまう。ひよんなことから始まった農体験だが、思いがけず功を奏す。土を踏みしめるとどこか自分が生きていることを実感する。緑に手を触れて自然の柔らかさを知る。上を向けば真つ赤な太陽にパワーをもらい、下を向けば小さな新芽に希望をもらう。気づけば会話が増え、笑顔が増えた。自然のエネルギーはまるで副作用なしの抗がん剤。痛みを忘れ、癌であることも忘れた。

そんな時、ふと虫食いだらけのヒマワリの葉が目につく。葉脈以外すべて食べ尽くされた葉。そこに癌にまみれた我が身を重ねる。それでも真つ直ぐ太陽に向かって伸びるヒマワリを見て「下を向いてちゃ駄目だ」と勇気をもらう。太陽も、ヒマワリも、上を向かせるチカラがある。だから自然と勇気が湧いた。「ちきしょう。癌になんかならなけりゃ」と思いながら、最後には生きとし生けるすべての命に感謝ができた。

あれから半年。今は治療をしながら会社に通い、週末になると畑仕事に邁進する。たとえ癌でも希望は捨てない。生きることもやめない。大切なのはどれだけ生きたかではない。どんな想いで生きたかだ。今では、諦めない『瘵』が『癌』のお守りになっている。